

ダーナ・インターナショナル・センターの活動

定 光 大 燈

一 はじめに

ネパール在住チベット難民との出会いから、彼らに教育や医療支援というかわりをもってきたことで、ネパールのみならずインドに点在しているチベットキャンプを訪ね、いろいろなことを学ばせて頂いた。そして普段通りに生活をして入ってくる情報とは違ってマスコミにまったく報道されないことなど、現地に行かなければとても理解できないことがあることに気づかされた。チベット難民としてインドやネパールに定住^①する方々と交流する中で、彼らが話すチベット民族のおかれた状況は潜潜たるものがある。彼らの悲痛な生の声の一部でもここでお伝えできれば幸いである。そして、こうした支援活動を通して見えてきたことを述べてみたい。

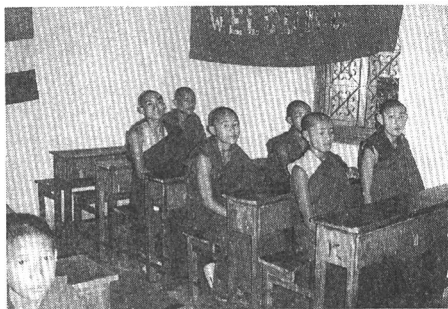
註①インド・ネパール以外のチベット難民を含めると、

チベット以外の地に定住している難民の数は、およそ十万人といわれている。

二 ダーナ・インターナショナル・センター(DIC)の活動

1 DICの発足と目的

広島県北の浄土真宗本願寺派の僧侶有志で組織するDIC^②(代表 寺山寿範 明正寺住職)は、一九八八年にネパールに定住するチベット難民に教育・医療の支援を目的に発足した。それまでに支援活動をしていた「ネパール在住チベット仏教徒難民救済の会」から引き続い



マハーセーナ, B, P, E, センター校の生徒たち
92年10月

教育支援は「救援の会」の支援を引き続いた形ではじまった。ボート・ナート地区にある、チベット寺院（ガデン・チョップリン・モナストリー）の付属施設には、チベットから逃げてくる子供たちを寺院の僧房に住まわせて教育してい

るマハーヤーナ・B・P・E・センター校（以下マハーヤーナ校）がある。ここで約三〇人の子供たちがチベット仏教を中心に英語やネパール語などを勉強している。僧房の一室が教室として使われていたが、教育環境を良くするため、学校の要望に答えて「救援の会」は僧院の隣接する土地に校舎を建てて寄贈した。校舎ができてからは年齢や、能力別（逃げてきた子供たちの語学能力や、ネパール在住年数などで分ける）に教育できるようにになった。ここで学び、卒業した優秀な学生は、インドのダラムサーラや南インドのチベットコロニーの大学に留学して、さらにレベルの高い学問を続けたいという。かれらの願いに答えて留学を支援するため、D I Cが里親を募集し奨学金を贈ることになって既に四年が過ぎた。しかし、今までに一五人以上もの留学生を支援

2 教育支援

た形で、ネパールの首都カトマンズの郊外のボート・ナート地区にあるチベット難民の子供たちが学ぶ学校に支援活動を続けている。一九八五年に校舎などを寄贈して活動を停止した「救援の会」の意志を継いで教育や新たに医療に支援をしようとして、新しいメンバーを加えてD I Cとして再スタートしたのである。また、今後は可能な限り諸外国の仏教徒と連帯、あるいは交流していくことも目的としている。

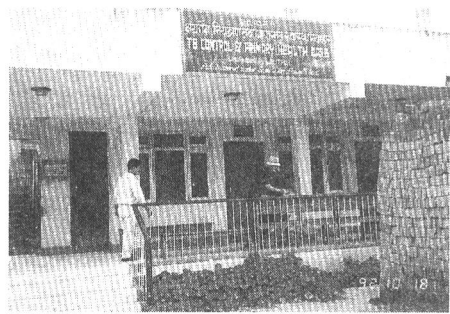


インドのダラムサーラの仏教大学に学ぶマハーセーナ, B, P, E センター校を卒業した学生

してきたが、なかには病気になるり中断した学生や、途中難しい学問についていけなくなり、ネパールに帰ったものもいる。そうしたインドに行く学生の数を補充する形で小さい子供を引き受けながら、僧院で引き受ける人数が限られているなかで、マハーヤーナ校ではだいたい三〇名位の生徒が学んでいた。ところが、二、三年前からチベットから逃げてくる子供が少なくなっているのので、生徒がだんだん少なくなってきたのである。D I Cでは団体旅行を企画実行して、ネパールを訪れた際に、文房具や衣類などを届けてきた。

3 医療支援

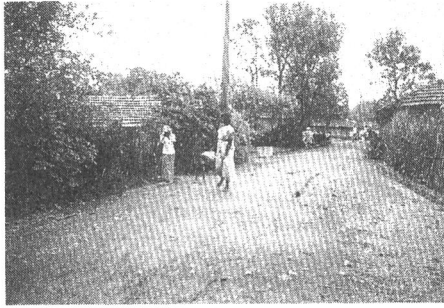
またD I Cでは、カトマンズの南。パタン市にあるジャワラケルキャンプの病院に医療支援をしている。このキャンプにチベット難民の医療や福祉、教育などチベット人自身で自分たちの生活向上のために組織された団体スノー・ライオン・ファンデーション（以下S L F）の本部がある。十二、三年前、ネパール政府より、外国からの資金援助を受けられる権利を与えられ、諸外国十数団体から支援を受けて運営されている。ネパール各地に点在するチベット難民の学校を運営したり、あるいは年老いて生活手段を持たない難民への年金援助など、その



カトマンズ南のパタン市にある
ジャワラケル キャンプにある病院
T. Bコントロールアンドプライマリーヘルスケア
91年ドイツ人医師の寄贈で新しい建物となった。

ぞれ病院を運営している。この病院（T Bコントロール & プライマリー・ヘルスケア）で診察しているチベット人医師・ツリーン先生が、キャンプ内の難民の結核患者に投与する抗結核剤がいつも不足している、と話されたことを受けて、三年前から購入資金を贈っている。初めは日本から抗結核剤を購入して、ネパールに送るよう努力してみたが、手続きの複雑さ、煩雑さの壁に阻まれて、結局購入資金を贈ることになったのである^④。昨年ツリーン先生は医療のレベルアップを図るため、現在は別の病院に移られたので、S L Fは新しいネパール人の医師を

活動は不足がちな資金の中で行われている。またS L Fは、カトマンズの中にあり、三か所のキャンプにそれ



インド、マハラシュトラ州 バンダラ県
バンダラ チベット キャンプ
92年六月入った頃
雨季に

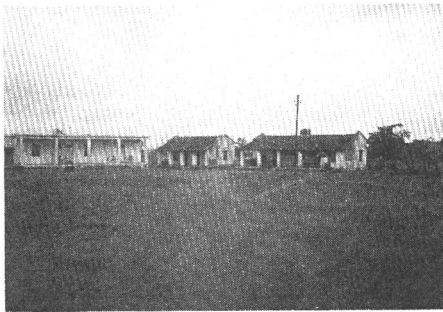
では、この医師の働いているキャンプ（中央インド・バンダラ・チベタン・セトルメント）に一昨年六月に出かけて調査し、その結果、今後このキャンプに病院建設の支援をすることに

雇い、現在これら三か所の病院の医師として働いてもらっている。DICでは引き続きSLFに支援を続けていく予定である。

DICの活動が月刊誌に掲載されて、インド人の仏教僧・サンガラトナ氏の目に留まったことで、こうした活動がインドのチベットキャンプの医師に知れることになった。彼はサンガラトナ氏の知り合いで、チベット伝統医学の医師・ドルジェ先生であった。そして三年前に直接彼から支援の要請の手紙が届いたのである。DIC

は、この医師の働いているキャンプ（中央インド・バンダラ・チベタン・セトルメント）に一昨年六月に出かけて調査し、その結果、今後このキャンプに病院建設の支援をすることに

なった。このバンダラ・キャンプは、ちょうどインドの真ん中にあるマハラシュトラ州のナグプール市より東に約一五〇キロのところにある。夏、日中温度が四五度を越す大変熱い所なので、チベット高原に住んでいたチベット人にとって、このキャンプは大変辛い所であったであろう。初めは多くの方が病気に悩まされたそうだが、このキャンプも地域のインド社会に受け入れられ、この病院では多くの貧しいインド人に対しても献身的な治療が行われている。一日多い時で百人を越す患者を診察するドルジェ先生は、「病院の建物が緊急の課題です」と。DICはその要望にこたえるため、キャンプを視察した後この病院の本部を訪問した。その本部は、インド北部のドラムサラにある。こここの幹部の方と協議した結果、新しい病院の青写真を作成していただき、そ



中の建物がTMAIのバンダラ支部病院
この前の広場が新しい病院の建設予定地

の通り建設が始まっている。

註②メンバーは現在七人で、事務所は広島県庄原市中本

町一〇一〇一〇 西楽寺に置いてある。

③ネパールには十四、五か所の難民キャンプが各地に点在している。首都のカトマンズにある三か所のキャンプに多くは定住していて、ジャワラケル・キャンプが一番集中している。三年前、SLFの本部に働く事務総長カルマ・タシさんを日本に招待して、DICに協力して下さる方々と交流して頂いた。

④広島県庁の薬務課の紹介で、明治製菓の広島支店と交渉し、抗結核剤やストレイプトマイシンをネパールに送ってもらうよう手続きをお願いした。法律の壁や、受けいれ側の書類の問題など手に入らないものもあり、結局日本から送るのを断念した。

⑤サンガラトナ氏は、九才の時天台宗堀沢祖門氏の所へ来られた。十五年間天台宗の修行をつまれ、インドに帰国された。ナグプールの市の郊外プーニ村に、禅定林を建て住職をされている。

三 活動を通して見えてきたもの

私が大学生の時、インド仏教学を専攻したことで、イ

ンドを旅行したことがある。その時、仏跡を巡拝していた多くのチベット人仏教徒に出会った。しかし特別な思いもなく、またチベット仏教にも余り関心を持たなかった。一九八五年に「救援の会」に頼まれてネパールへ行き、マハーヤーナ校に校舎建設の要望があることや、チベット難民の状況などを調査したことから、チベット難民の方々と深いご縁ができた。その後、DICが発足して私が事務局をすることになり、積極的に支援活動をするようになった。そして七年が過ぎようとしている。その間、毎年のように六回訪問した。マハーヤーナ校に初めて行った時、幼い顔を残していた子供も、今は大学に行っている青年僧である。一昨年十月、彼らの成長した姿を楽しみに二年ぶりに訪問した。しかし、学生が少なくなっているのである。そのことをマハーヤーナ校のサンギャル・ギャッツオ校長先生に尋ねてみたところヒマラヤを越えて、ネパールに逃げてくる子供が激減しているのだという。

マハーヤーナ校はチベット仏教文化を継承してくれる僧侶を教育していく学校である。今中国占領下にあるチベット^⑥では、一般の学校においては中国語で教育がなされているといわれ、仏教を基本としたチベットの伝統文化を古くから伝わる方法で学べるのは、インドやネパー

ルの寺院なのだそうである。

チベット民族は、家庭に男子が二人以上恵まれば、その一人は僧侶に育てたいと思うほどに熱心な仏教徒である。そのような思いが最近まで小さい子供をヒマラヤ越えさせていた。しかし、最近国境付近の警戒が厳しく、また難民として逃げることできた秘密のヒマラヤ越えのルートが中国の兵隊に抑えられたのだと、マハーヤーナ校の校長先生は厳しい顔で話していた。チベット仏教の伝統を引き継ぐ子供を捜しに行かなければ、と先生は合法的にチベットに入るため、ネパールの中国大使館にパスポートの申請をした。受理はされても、発行されるとは限らないのだという。チベット難民にとって中国を話題にする時の激しい感情は、祖国を思う心に反比例して、表情は本当に堅い。先生と話した何日前、ネパールの中国大使館員と思われる中国人が、ポート・ナートの仏塔を見学する観光客を装って来た時、チベット人のブライニングが止まらなかつたと言う。難民の中国に対する反感は、チベットの状況が逐一伝わってくるからである。

校長先生の民族の誇りを棚上げにしてまで、そして自ら中国人のパスポートを持つという不快感をかなぐり捨てても、子供たちを育てようとされる思いは実現する

のであろうか。

今年一月校長先生から手紙が来た。その中にガデン・チョップリン・モナストリー寺院の僧侶数人で、チベット内にある自分たちの寺院跡を訪問した写真が同封されていた。それは破壊された寺院跡で撮られていた。手紙によるとパスポートを取得できない校長先生に代わってチベットに入国したということであるが、子供を連れて帰ることはできなかったと書かれていた。

一昨年一〇月にマハーヤーナ校で、インド留学中病気をして帰っていた学生に会った。その年の二月の寒いダラムサーラで不調を訴え、治療のため親元の校長先生のところへ帰っていたのである。春頃チベットにいる母親にそのことを手紙に書いた。急ぎヒマラヤを越えてネパールにいる子供に会いに行こうとした母は、国境付近にて中国兵に持ち物を全部収奪されて、路上で死に絶えていたという。その伝えが耳に入り、学生は一か月も立ち上がれなかつたと話していた。こうした国境近くでの中国兵の残虐な行為は、ヒマラヤ越えしたチベット難民なら誰でも語れる。それほど日常のできごとのように多いという。

やはり一昨年六月にダラムサーラを訪ねた折に、亡命政府直轄の本屋さんに寄ってみた。多くの本が置いて

ある入口の部屋の裏には、中国の侵した残虐な行為を数十点もパネルにして展示してあった。ネパールのチベット難民の方々から聞いた話を、直接写真で確かめた形となった。その中には、あの忌わしきタムジン^⑥(批判集会)の写真もあった。

また、一九八七年一〇月一日に解放されたチベット僧の写真が絵はがきとなっていたので、数枚購入して帰った。弾圧を受けていたこの僧はチベット独立を唱えるラサでの「暴動」(中国側の発表)で解放された。そのニュースは、僧侶のひどい火傷とともに世界中へ流された。ところが、そこで手に入れたチベット亡命政府の広報紙「チベタン・ブルティン」三・四月号(一九九二年)には、二月二日の夜に彼は僧院の一室で不審死をとげたと伝えていた。中国当局の発表では自殺となっているが、それを誰も信じるものはないという。

その絵はがきを、東京のチベット亡命政府極東代表部に送って確認したところ、絵はがきの人物は、解放後不審死をとげた僧侶・ジャンパ・テンジン氏と思われる由手紙をいただいた。

一九九二年九月二三日から三回に分けて、中国は「チベットの主権帰属と人権の状況」を『人民日報』海外版で公式に発表した。その中でチベットの宗教の自由つま

り信仰の自由を高らかに謳っている。このことをその年の一〇月にネパールを訪問した時マハーヤーナ校の校長先生に話したら、それは観光目的での寺院か、もしくは欧米諸国の批判をかむすためで、まじめに信仰している僧侶や仏教の教えなどは本当に非常に警戒心を持っているように見られているそうである。一九五九年以前にあった大小合わせて三〇〇〇以上あった寺院は、今日三〇を数えることができない。そして校長先生にとってなにより辛いのは、チベットにいる若い人から仏教の信仰がなくなってきたることである。これこそ中国の意図している正にチベット伝統文化の破壊である。中国人がチベットに移住してきて、すでにチベット人の人口を越えたという。このことは、チベット民族の悲願「チベット独立」が困難な状況になりつつあることと同時に、中国のチベット占領を併合として動かしがたいものとなりつつあることを意味するのである。つまりチベットの中国化がどんどん進んでいるのである。

註⑥日本でチベットといわれているのは、中華人民共和国の西藏自治区のことだが、もともとは長い歴史を有する独立国であった。国土も今の自治区の隣接した地域を含めて海拔四〇〇〇メートルを越える高原地帯で、およそ今の中国の四分の一の面積をもって

いた。チベットの文化は、中国の文化と基本的に違い、文字はインド系音標文字で、インドから仏教が伝わりと共に発展した文化だが、チベットはインドとも中国とも異なる独自の仏教文化を有する国であった。ところが、一九四九年、中華人民共和国が成立すると、チベットは自国の領土だと大軍をチベットに侵入させ、中国に併合してしまった。一九五五年三月、中国のチベット支配に反対するチベット人の大蜂起が起こり、中国の軍隊と衝突する事態を恐れた第一四世ダライ・ラマ法王は衝突を避けるためインドに亡命した。しかしその時、中国軍によっておびたしい数のチベット人が殺された。一九五一年から八三年まで、戦闘や餓死、死刑獄死といった形での不自然死をとげたチベット人は、一二〇万人に達すると、チベット亡命政府は八四年春に公表した。中国政府のチベットに対する異民族支配は、差別的で、人権侵害を侵している。チベット独立を訴える者は、投獄・拷問といった非人道的な扱いが今日まで続いているという。

(英国議会人権擁護グループ報告)

『チベット白書』日中出版刊参照)

註⑦中国に占領される以前のチベットでは、ほとんどの

家庭で少なくとも家族の一人は僧院に送っていた。僧侶の数は国全体の人口の二〇％に達してたのでは、といわれている。

註⑧ タムジン (Tibzang)

公衆の面前で個人を卑しめたり、政治的に洗脳する集会のこと。その集団のなかには子供たちも含まれ、しばしば両親の罪を糾弾し、石を投げなければならなかった。また親たちも子供たちが抵抗運動に参加した場合、処刑されるところを見物させられる。そしてその上、処刑に使用された銃弾の費用を支払い、「反社会分子を抹殺」してくれた中国人に「感謝」させられた。

(『前掲書』参照)

註⑨この暴動(チベット人にとっては命がけの抗議)の原因となったのは、一九八七年九月二四日、ラサの市営競技場で一万〜一万五千人が参加した公開人民裁判である。この時三人のチベット人が殺人罪で死刑、他に八人が重大な刑事犯罪でそれぞれ期間の異なる禁固刑を受けた。死刑判決を受けた二人は、九月二四日と二五日に処刑された。これに抗議して、二七日僧侶や一般チベット人がラサでデモを刊行した。その四日後にも(一〇月一日)独立を叫び、チベットの国旗を掲げるデモが再発した。

(詳しくは『前掲書』九一頁)

四 おわりに

大きな民族が小さな民族を同化することは、小さな民族の伝統文化を消滅させることになる。それは歴史の中で証明されている。しかしそのことが許されることではない。「難民」が出れば、引き受ける国の社会問題を起こす。国際政治のはざまに置かれた難民問題は、人権問題だと捉えていく視点を見逃してはいないだろうか。人類はいろいろな過ちを犯しながら、今日まで歴史を重ねてきている。歴史を正しく学ばなければならない。そうした認識の歴史観をもつなら、今のチベットで仏教寺院が破壊されたり、信仰篤い仏教徒が苦難の人生を歩んでいる時、同じ仏教徒として対岸の火事のごとく見れないのである。日本人は、歴史の中で日韓併合という過ちを犯した。そして今日韓国が一番嫌いな国は日本となっている。先日の韓国の大統領の訪日を契機に一層の交流で少しづつは改善していくことを願うがしかし、まだまだに従軍慰安婦の問題は取り残された人権問題として重たく残っている。しかし日本人はそれに気づいても、アイヌ民族を同化したことへの認識は薄い。私とかかわりの

ないことは無関心である。これが人間としてとても罪深いところである。チベット問題を考えることは、中国にその誤りを訴えるだけでなく、人権の問題や、私どもの足下にある問題を浮かび上がらせているのである。

浄土真宗本願寺派 西楽寺住職

定光 大燈(DIC事務局)